平成２６年度京都外国語大学校友会教志会
英語授業実践報告会・研究会実施報告書

7月27日（日）学生13名を含む31名の参加を得て、本学1号館3階132教室で実施した。以下に講演及び授業実践のサマリー・感想を記して、報告書とした。

京都外国語大学教授、映画英語教育学会会長、倉田誠先生から「Let X go構文の多義性と汎用性を考える一映画とメディアでの実証一」と題してご講演を頂いた。

「Let x go」構文を映画の台詞から抽出し、１２もの異なる意味を表す事を映画のシーンを確認しながら学習した。

"Frozen"の中の"Let it go"が渾身の力で歌われる場面には、Elsaが不安を乗り越えて、これまで否定的なものとして封印させられた「凍らせる力」を肯定的に捉えて自らを開放し、その力で氷の宮殿と"Olaf"を創り出し、自信を取り戻した事を力強く宣言する姿が感動的な描かれている。画面から彼女が歌う"let it go"のitは「凍らせる力」であり、"go=happen"であり、代表的な"go=move"でない事がわかる。

文脈・音声で規定される「音声英語」の多義性の理解は、読書量や実際の会話量を積み重ねていけば、おのずと見えてくるものである。

京都外国語大学付属京都西高等学校教諭前田久夫先生は発表表題、「なぜ教育支援ボランディアか」について発表された。社会的貢献ボランティア活動の一環として、地域住民を対象とした英語教室を運営している。クロスワードパズル、構文練習ドリル、スピーチ等の多様な教材を使い、参加者が飽きない授業を心がけている。

受講者の年齢が上がる程、習得へのハードルが高くなる現実があるが、学習意欲を維持し続けられる様工夫している。

三重県立津西高等学校教諭杼原均先生は発表表題「宇宙から考えるグローバルコミュニケーション」について発表された。

新学習指導要領下での検定教科書では、日本人宇宙飛行士若田光一氏、野口聡一氏、ISS,小惑星探査機「はやぶさ」などが素材として記載されている。宇宙では、限られた通信手段で他者と協力したり、適切な状況判断を迅速に行う事が不可避な状況にある。コミュニケーションの不備・不足は重大な事故や死に至る事がる。その事を想定し、高校生レベルの英語で書かれているプリントを使って、ミッションを遂行する人物・組織に着目させたり、役割と責任、使命感、やり抜く強い意思の大切さ、創意工夫、真理の探求などについて考えさせる宇宙飛行士の訓練用マニュアルを応用して、それを投げ込み教材として実施している。

最後の研究協議・交流会では、「私の英語学習法」をテーマに交流した。自らの学習スタイルを自問する事は、生徒一人一人の学習スタイルをより公平に評価する事につながっている。優れた授業者は同時に、優れた学習者でもあります。

文末になりましたが、京都外国語大学理事長・総長森田嘉一先生並びに京都外国語大学校友会よりご支援金を頂いた事を記して感謝申し上げます。

（文責）教志会　会長　田中　道博